

7. コレクションの行末

－青春を謳歌した松本高校へ－

1987年、小谷は国立民族学博物館館長の梅棹忠夫と対談しました。京都生まれで山と本が大好きなものの同士で意気投合し、その対談の終わりに、将来コレクションをどうするべきかと梅棹に相談します。同じ頃、信州大学ではキャンパスの地の利を生かし、山岳について分野や地域と越えて総合的に研究する施設を設立することが提唱されました。

それから数年後、地球や山岳の環境と開発に関する国際会議がいく度か開かれ、2002年を国際山岳年とすることが国連決議されました。それに合わせて、信州大学は2001年に山岳科学フォーラムを開催し、翌年、山岳科学総合研究所を設立します。

2001年のフォーラムには梅棹が招かれて、対談形式の講演を行い、山岳研究のための図書と関連資料の整備の重要性を力説します。そのなかで、松高出身である小谷の山書コレクションを紹介しました。梅棹は松高の後身である信州大学に山岳研究拠点ができることを話し、小谷に協力を要請します。大学からもアプローチがあり、小谷は名残惜しくも、コレクションを信州大学に寄贈することを決心します。

2002年、コレクションを寄贈した小谷は、記念フォーラムに招かれ、体調が芳しくない中でもコレクションについて講演し、2005年11月3日の銀嶺祭でのコレクション展示会にも来学し、講演しました。

翌2006年1月10日、氣力を振り絞り、絶筆となる「戦後の学校混乱期と西寮誕生」を執筆します。

同3月23日、小谷 永眠す、享年81才。最後まで松高と松本の地を愛した男でした。



信州大学への寄贈

展示資料No. 47

『月刊みんぱく』 1987 10月号

国立民族学博物館編

千里文化財団

1987年10月5日発行

小谷達雄氏 蔵

2-7p 館長対談

「山を読んでいたのしむ」

ゲスト 小谷 隆一

(イセト紙工社長、京都山岳連盟副会長)

梅棹忠夫氏との対談はコレクションの意義とその行末について小谷に大きな影響を与えた。



「世界民族音楽大系」は、音楽教育者・研究者・愛好家をはじめ、カラフルな民俗衣装に注目する服飾家、民族固有のリズムと旋律で踊るその姿に身体表現の可能性を探る舞踊家の方々など、多方面の人々に待望久しい「世界で初めて」の「本格的」な大系です。

本大系は、従来見られた映像番組からの単なる抽出・羅列による全般的な物ではなく、本大系独自の取材班を編成、今回初めて映像で収録された貴重な曲も多数収録しています。この偉業ともいえる本企画は、早くも世界の学識者の注目をあつめ、「今世紀の文化遺産の一つ」と絶賛する声も寄せられています。

ご予約にあたっては、監修・藤井知昭(国立民族学博物館教授)、制作・日本ビクターをぜひご確認ください。

★監修：藤井知昭(国立民族学博物館教授) 待望の決定版いよいよ今秋発売!!

オーディオカラーによる
世界民族音楽大系

収録国:100ヶ国(地域) 収録曲:350余曲 収録時間:30時間

アジア全域をくまなく網羅!!
第1期(今秋発売)の収録曲目編成決まる!!

(西アジア地域は第2期(来春発売)に収録)

国名	収録国名	主な内容	主な出演団体・収録地区
東	韓国(1)	独奏「表正萬方之曲」 独唱等独奏	韓国国立国楽院ほか
ア	韓国(2)	独奏、コプリ、パンソリ 農楽	韓国国立舞踊団ほか
ジ	中国(1)	川劇「白蛇伝」、梅花操 蹴球舞	福建南音劇団 東方歌舞団ほか
ア	中国(2)	馬鞍山青雲舞臺打歌 チベット民族舞踊ほか全17曲	雲南西山舞臺ほか
編	中国(3)	変奏を数回する時の歌 子守唄、サンバほか全14曲	新疆ウイグル歌舞団ほか
東	ベトナム	木琴とドラの合奏 アプサラダンス	ベトナム少数民族音楽祭 カンボジアほか
南	タイ	ネールダンス、民族楽演奏 サウンの演奏と歌ほか全18曲	タイ王立舞踊団 ビルマほか
ア	マレーシア	タリナイ・ラヤン・マス パルビントリ演奏ほか全17曲	マレーシア国立舞踊団 フィリピン・カリナガ族ほか
ジ	インドネシア	スカル・ジュブン チャロナラン	ブリアタン歌舞団ほか
ア	インドネシア	ケチャ、ガムラン・ドウダン バントウン	バリ島タガス スダダ地方ほか
編	インド	ウィーナ、シタールの演奏 バラタムティアムほか全7曲	カタカリ舞踊団ほか
南	インド	仮面舞踊プルリアのチョウ ヤクシャガナー	現地収録
ア	インド	ベンガルの民謡 舞臺踊り	インド音楽舞踊団ほか
ジ	スリランカ	舞臺ぼらいの踊り 山民の踊り	スリランカ民族舞踊団 パンダラダシュ国立民族舞踊団
ア	バングラデシュ	ロロハン	イスラム歌謡グループほか
編	ネパール	ガイネ ブータン	現地収録
		仮面舞踊	ほか全1曲

※編成の都合上、一部変更する場合がございます

ビデオディスク(VHD)全16巻 (第1期8巻、第2期8巻)
ビニオカセット(VHS)全30巻 (第1期16巻、第2期16巻)

本大系の特長

- ① 世界初の音と映像による画期的な一大企画
- ② 充実のアジア地域
- ③ 本企画独自の海外取材を敢行
- ④ ビデオディスク(VHD)の機能・特性を100%発揮
- ⑤ 懇切丁寧な別冊解説書

協力：平凡社／下中記念財団
国立民族学博物館／NHK
ほか映像提供協力先11社

発売予定 第1期昭和62年(11月中旬) 価格未定
第2期昭和63年(5月中旬)

お問合わせは 総発売元 平凡社販売株式会社 〒102 東京都千代田区九段南2丁目2番4号新九段ビル
TEL: 03(265)5655(代表)

企画・制作 **日本ビクター株式会社** 〒103 東京都中央区日本橋本町3-4-7 新日本橋ビル
ビデオソフト事業部 特設部民族音楽大系特別プロジェクト

『月刊みんぱく』 1987 10 月号

『山なみ帖その後』山を読んで楽しむ

— 梅棹忠夫氏との対談 — 結び部分より引用

小谷（前略） それと、もうひとつ困っていることは、いつまで山の本を集めるのかということです。最近本の内容が悪くなっています。

梅棹 それは覚悟の問題ですね。客観的基準はなにもないんですから、自分で決めなしょうがない。コレクションというものは底抜けのものですから、完結するということがありません。

小谷 私が死んだら民博へさしあげるかもしれません。（笑）

梅棹 それは受け取るかどうか、わかりませんよ。民博は国の機関ですから願書を出してもらわないかん。（笑） しかしそんなことは考えんでもよろしい。その始末を考えると、これはコレクションということからいえば邪道ですよ。我が一生、これで楽しんだ、その抜け殻ですから。

小谷 たしかにそんなところがありますね。

梅棹 私はその点、サバサバとしています。私の山の本はすべて京大学士山岳会に寄付しました。爽快なる無所有という思想が根本にある。なにも持たない。これでよろしいのや。コレクションのある種の哲学みたいな話になりましたが、コレクションというのは単なる所有欲ではなくて、結局は楽しみごとですからね。今後大いに楽しんでください。

展示資料No. 48

信州大学山岳科学研究所 (アルプス研) 構想

昭和62年3月
1987年

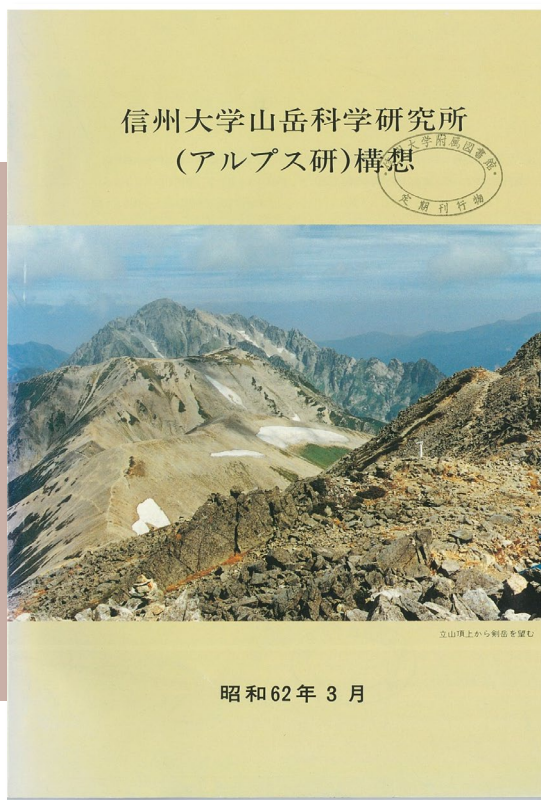
信州大学附属図書館 蔵

同じ頃、信州大学では山岳科学に関わる研究施設を設立する構想が形作られていた。

はしがき

わが国で山岳のための研究所をつくるには信州大学程適切な大学はない。そこで信州大学の有志が集まって、ぽつぽつと案をまとめてきた次第である。ここにその主旨、最低の研究構想、信州大学の山岳に関する研究の状況を紹介し、大方のご批判をあおぎつつ、御賛同が得られれば設立の方向へ持っていきたいと考える。

信州大学山岳研究所構想のための有志の会一同



山岳科学総合研究所への道程

“山岳”をめぐる世界の動き

国際山岳年 (International Year of Mountains)

2002年は国際山岳年

「国際山岳年」は、山岳山間地帯の環境保全および持続可能な開発を促進することにより、同地帯の社会の福利を発展させることを目的としています。山地は水やサービスの供給、食糧の安全を担っています。このような山岳地帯の重要性や特有な生態系への意識を高めること、そして山岳山間地帯の社会の文化的伝統を守り奨励することを目指しています。

国際山岳年の主導機関は国連食糧農業機関(FAO)です。

毎年12月11日は 国際山岳デー

(国際連合広報センターウェブサイトより)

経緯

1992年 環境と開発に関する国連会議(地球サミット)開催
行動計画アジェンダ21採択

第13章「脆弱な生態系の管理、持続可能な山岳開発」

1998年

・第53回国連総会

地球サミット10周年にあたる2002年を国際山岳年とする
決議

・ビシュケク世界山サミット開催(キルギス共和国)

ビシュケク世界山サミットでは国連国際山岳年を記念し、
毎年12月11日を国際山の日とすることで合意し、その後、
国連総会で決議された。

・世界78か国に国内委員会が発足

○ 国際山岳年日本委員会(2001-2003)
委員長 田部井淳子

国連国際山岳年協賛

信州大学 山岳科学フォーラム

ー山岳地域における自然と人間との共存ー

平成13年10月26日～27日

(2001年 会場:松本文化会館3階国際会議室)



プログラム

シンポジウム

セッション1 山への思い

セッション2 山の営み

セッション3 山の恵み(1)

セッション4 山の恵み(2)

～山と観光～

茅野 實(八十二銀行取締役会長)

特別講演会 山岳地域の自然環境と人類との共生に向けて

司会 野村 彰夫(信州大学工学部教授)

～山と学問～

梅棹 忠夫(国立民族学博物館顧問、京都大学名誉教授)

聞き役:中嶋 聞多(信州大学人文学部助教授)

～極域科学と山岳科学の接点～

渡辺 興亜(国立極地研究所)

～山・川・人～

沖野 外輝夫(信州大学理学部長)

特別展示 信州自然科学館

梅棹 忠夫（うめさお ただお）

1920-2010

略歴

- 1920年 京都市生まれ
- 1932年 京都府立京都第一中学校
博物同好会と山岳部に入部
- 1936年 第三高等学校入学山岳部に入部。
- 1937年 この年と翌年の山行きが100日を超え、落第
- 1941年 京都帝国大学理学部に入学（主に動物学を専攻）
- 1943年 京都帝国大学理学部動物学科卒業
徴兵検査にて第一乙種合格（戦車兵）となる
京都大学大学院入学
- 1945年 兵役
- 1946年 京都大学大学院に復学
- 1949年 大阪市立大学工学部助教授
- 1955年 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊参加
- 1974年 国立民族学博物館初代館長就任
- 1996年 京都大学名誉教授

～山と学問～

わたしは中学生のころから京都北山にのぼりはじめ、高等学校では南アルプス、中央アルプス、北アルプスと信州の山やまをあるきまわった。その後、登山から探検に手をひろげて、学問領域は生態学から民族学や比較文明学にまでひろがったが、山に対するつよいおもいは終始かわっていない。山での経験がわたしの学問のすべての源泉であった。信州大学では山岳科学総合研究所（仮称）の創設にむけて、全学をあげてとりくもうとされているとうかがった。「山岳科学」とはなにか。これを機会に、わたしなりのかんがえをのべてみたい。

現在わたしが顧問をしている国立民族学博物館は、博物館と名のつてはいるが、文部科学省直轄の研究所であり、日本における民族学研究のセンターである。わたしはこの博物館の計画段階からかわり、創設準備室長として、創設後は博物館長として運営にたずさわった。その25年にわたる経験が、信州大学山岳科学総合研究所の創設と運営の参考になればさいわいである。

山岳科学フォーラム——山岳地域における自然と人間との共存——

特別講演 〈山と学問〉 梅棹忠夫氏と中嶋氏の対談から

梅棹

日本は山の研究についても、そうとう伝統のある国なのです。こんど山岳研究所の拠点をおつくりになるというのは、たいへんけっこうなことだと思います。そのときに、ぜひとも山岳図書の大コレクションをここにつくっていただきたい。全国に公開できるような形でですね。

中嶋

学長も会場におりますので、きつと特別予算で購入してくださると思います。

梅棹

そうしてください。さきほどお話しました京大旅行部の山岳文献コレクションは、ざんねんながら、戦後まもないころ火事で焼失してしまったのです。今、日本に山岳図書のコレクションで大きいものはありません。

(中略)

じつは、「日本山書の会」というのがあるんです。全国で山の本の好きな人が集まって作っている会です。京都商工会議所の副会頭の「小谷隆一」という人がおりまして、この人はだいぶ古いですが、ここの旧制松本高校出身で、北杜夫と同級くらいだったと思います。

中嶋

じゃもう、商工会議所の方は退かれていますか。

梅棹

そうかもしれません。わたしよりすこし若い。その人が山書の会の有力メンバーで、ずいぶん本を集めているんです。この種の山岳書の拠点をぜひとも信州大学に作っていただきたい。

中嶋

なるほど。いいご提案をいただきました。ぜひがんばって集めたいと思います。

梅棹

ついでに申し上げますが、古本屋に頼んでおけば、今ならまだ旧制高校や大学の山岳部の報告書が手に入るはずですよ。これを集めていただきたい。

中嶋

国際的な文献と別に、日本の登山史ですか。

梅棹

日本登山史というと、スポーツの話かとバカにされるかもしれませんが、これは日本文明史の大きなひとコマなんです。今、山岳部はどこもはやらない。アルピニズムは日本でも一九三〇年くらいから非常に盛んになりました。高校、大学の山岳部、登山団体です。それぞれ部報が出ています。

これは本当に貴重なものなので、ぜひ今のうちに集めておいていただきたいのです。

中嶋

はい、がんばります

梅棹

この山岳科学研究所で日本登山史をやっていたきたいんです。日本の登山史はおもしろい。さきほども言いましたが、修験道に引き続いての日本の近代アルピニズムの歴史、これはまさに日本の近代史の大きなひとコマですからね。

中嶋

いやたいへんな宿題をいただいてしまいました。

山岳科学叢書Ⅰ『山に学ぶ山に生きる』 信州大学山岳科学総合研究所(編)

2003 年5 月31 日 信濃毎日新聞社刊
29～31ページより引用

(註)

信州大学はこのフォーラムのあと小谷隆一氏と連絡をとり、幾度かの会談をもった。その結果、小谷氏の膨大な山岳書コレクションは信州大学に移管されることになったという。

小谷氏には「山なみ帖」(1981年8月 名溪堂)という著書がある。その続編をまさに出版しようと準備していたさなかに、かれは亡くなってしまった。その遺志をついで、残されたご家族が「山なみ帖 その後」(2008 年11月 名溪堂)という本を出された。小谷氏は、惜しみながらも決心して信州大学に蔵書を寄贈したいきさつについて一文を書いておられたようで、それは「山の書物の楽しみー小谷コレクションの展開と結末」として「山なみ帖 その後」に収録されている。

梅棹 忠夫氏メモ

山岳科学総合研究所の設立

- 2001年5月31日 第3回運営諮問委員会開催
山岳科学総合研究所構想に対する説明と意見
※信大NOW別冊2001年9月に意見掲載
- 2002年4月1日 学内措置にて山岳科学総合研究所設置
森本 尚武学長
在任期間 1999年6月11日～2003年6月10日
- 2002年5月16日 山岳科学総合研究所規程(395号)施行
※4月1日から適用

YAMA NET JAPAN

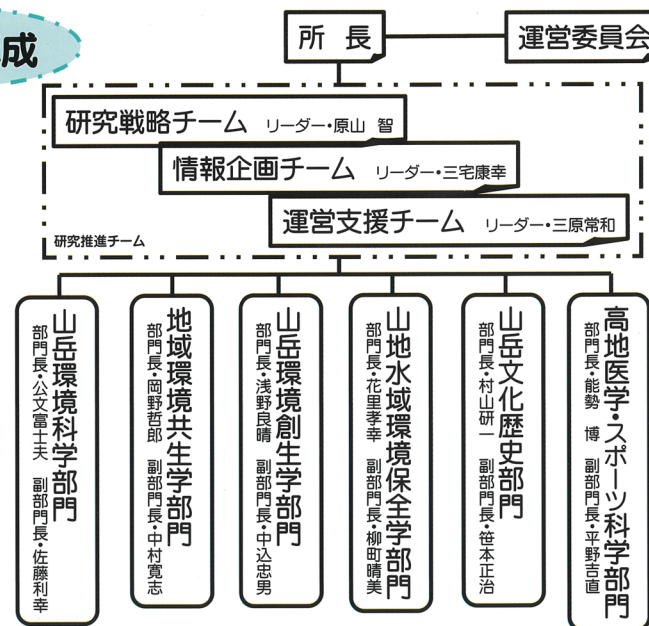
国際山岳年日本委員会の後継機関としてYAMA NET JAPANが設置され、信州大学が事務局となる。

運営委員長:高石 道明 留学生センター教授

研究施設配置



組織構成



信州のフィールドを生かした、自然と人間の共生を追及する新たな学問領域「山岳科学」の創造を目指して、2002年4月に「山岳科学総合研究所」を設立しました。

初代所長 茅野 實

連絡先: 山岳科学総合研究所運営支援チーム
〒390-8621 松本市旭3-1-1
Tel: 0263-37-2432 Fax: 0263-37-2438
e-mail: suims@shinshu-u.ac.jp

小谷コレクションの寄贈

展示資料No. 49

『山なみ帖 その後』

「私のコレクションとその結末」

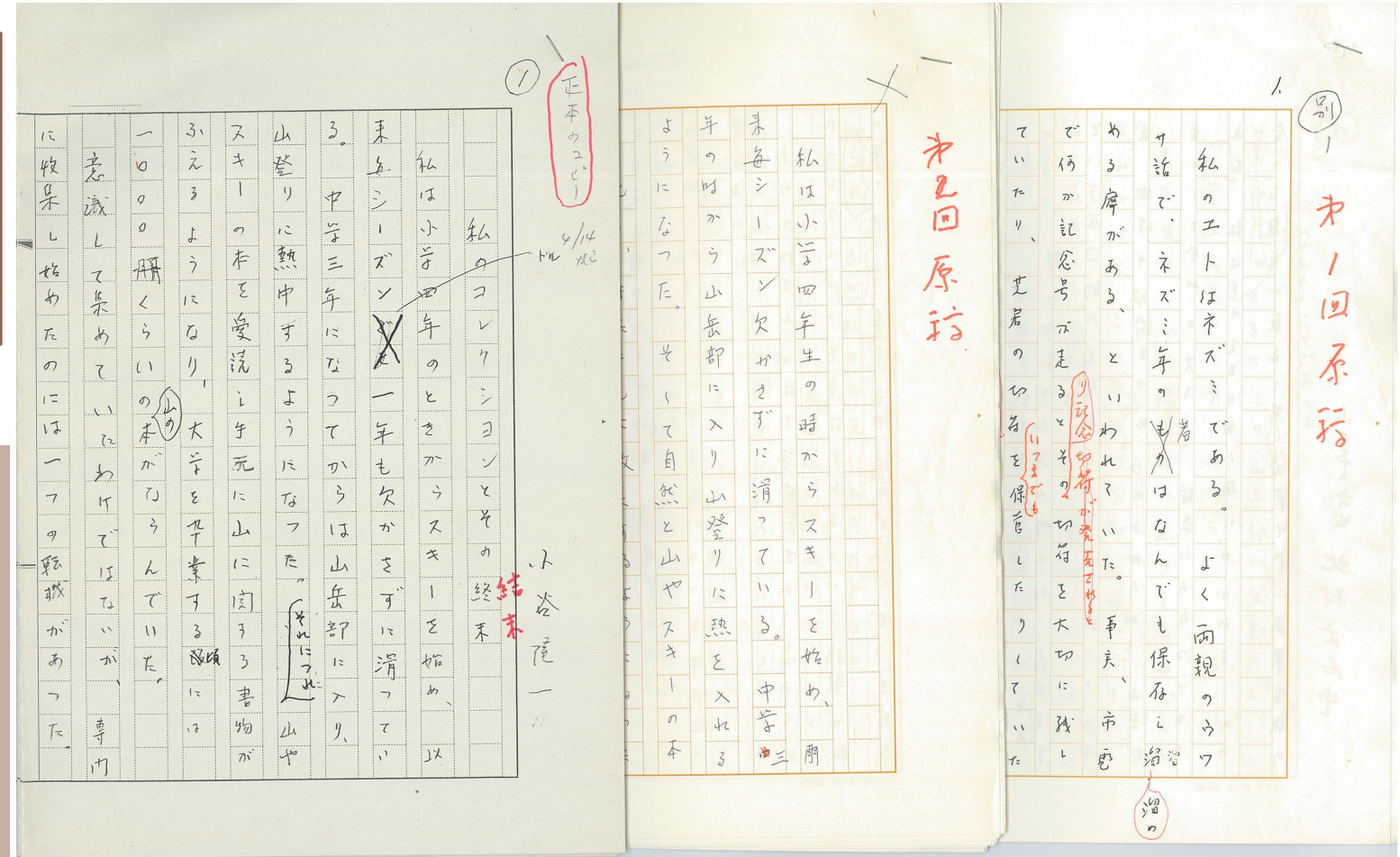
小谷直筆原稿

第1回原稿、第2回原稿、第3回原稿

小谷達雄氏 蔵

第1回から第3回原稿ではそれぞれの記述が大きく変わっている。自慢のコレクションへの愛情とそれを手放すことへの葛藤が伝わってくる。

特に第2回原稿では松本高等学校で過ごした日々への想いが切々と語られている。



「私のコレクションとその結末」

『山なみ帖 その後』第2回原稿より

（前略）

私はいくつもの候補をあげて心の中でえがいてみた。その結果、私の人生の中で最も感動したのはいつの時だったか、と指を折って数えた。結婚のとき、東大に入学したとき、いくつか思い出が甦って来た。しかし、最も強烈に浮かんできるのは、旧制松本高校に入学したときだった。商業校卒業のため、苦勞して入学した松本高校、そして青春を謳歌して過ごした三年間の松本での生活。一生を通じてこのときほど純粋に生きたトキはなかった。

私は迷うことなく信州大学と心に決めた。呼び名が変わっても私にとって、大きな感動を与えてくれた母校である。西に常念・槍ヶ岳、東に王ヶ鼻・鉢伏山を仰ぎみて過ごした三年間の松本の生活は五十年を経た今も瞭に浮かんで離れようもないときであった。商業学校を卒業したばかりに、人一倍苦勞して合格した松本高校だった。恐らく人生で最も感動した時代であった。

私は大切にしてきた蔵書の送り先をちゅうちよなく信州大学と決定した。

（後略）

「私のコレクションとその結末」

『山なみ帖 その後』より

（前略）

信州大学といえば私の母校である松本高校の後を継ぐ大学である。私の心は動いた。信州大学の森本尚武学長からも何度かご要請があった。

旧制松高の後を継ぐ母校とでもいうべき大学であること、梅棹先生のご推挽があったことなどを、私の気持ちは信州大学に差し上げることに決まった。

これらの書物類は二〇〇二年の秋、私のささやかな書庫を後にして信州大学へと巣立っていった。四度に分けて搬出されたが、次第に空になっていく本棚を見るたびに惜別の情を禁じることはできなかった。いくつかの本を瞭に浮かべ眠れない夜もあった。ああ、あの本は置いておきたかった、と惜しむ気持ちはあとを絶たない。

しかし私は後悔していない。梅棹先生が私のコレクションを高く評価してくださったことに大きな誇りを感じたからである。

（後略）

コレクションの搬出

期日：2002年10月22日、11月12日、12月10日、2003年1月14日

2003年1月24日コレクションの搬出時の様子



貴重本の梱包



空になった移動式書架の前で



森本学長より小谷隆一氏へ感謝状贈呈(2003年1月31日)
右端は小谷貞子夫人

山岳科学総合研究所と小谷コレクション

展示資料No. 50

小谷コレクション受入記念 ポスト国際山岳年を展望する

第2回山岳科学フォーラム

「登山の将来」

2003年11月22日～23日

(会場:松本文化会館3階国際会議室)



第2回山岳科学フォーラム

プログラム

第1セッション わが国の登山文化

講演 「近代の山・人・文学」近藤 信行(作家)

対談 「登山と書物」小谷 隆一(イセト一名誉会長)

聞き手 和田 敦彦(信州大学人文学部)

パネル討論 「わが国の登山文化」

近藤 信行、小谷 隆一、菊地 俊朗(山岳ジャーナリスト)

笹本 正治(信州大学人文学部)

司会 和田 敦彦



※ 近藤 信行氏
山なみ帖附録内の「文学の縁・
山の縁」を執筆されている



Wetterhorn 3,701 m

<信州大学銀嶺祭 11月4日(金) 前夜祭~6日(日)>

信州大学附属図書館が所蔵する『小谷コレクション』は、登山、山岳、気象、旅行などの山に関する刊行本・報告書・古文書のコレクションです。初版本・愛蔵本その他古今東西の貴重な山岳関係資料が多数含まれます。今回の展示会は「小谷隆一氏と山岳図書館コレクション」と題し、コレクション寄贈者小谷隆一氏の紹介をテーマとして企画しました。

入場無料

展示 10:00~16:00

信州大学附属図書館松本合同図書館3階特別資料室

講演

「山・人・本を語る」平成17年11月3日(祝)13:30~15:30

講演者 小谷隆一氏 司会 高石道明教授(信州大学山岳科学総合研究所)

会場 松本合同図書館1階会議室

ビデオ上映

上映日時:11月3日(16:00-16:40)、11月4日~6日(11:00-11:40,14:00-14:40)

「アコンカグアの白い風と赤い月」「チコモランマへの夢のはじまり(未公開)」

撮影・製作:舟橋栄子氏

ホームページアドレス <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/>



小谷隆一氏

アクセス



JR松本駅南側、エスエフ地下1階の松本バスターミナル図書からの「信大南校経由湯田山行き」で「大学西門」下車。約15分。

お問合せ先

信州大学附属図書館総務課

住所 松本市旭3-1-1 電話0263-37-2173
mail:library@gipwc.shinshu-u.ac.jp

車でみえる方へ

構内は駐車できません。公営駐車場をご利用ください。

2007年(平成19年)

学都松本 小谷コレクション展 松本市立博物館 松本市市制施行100周年記念事業



展示会ご案内 <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/tenjikai2005a.html>

ビデオ上映会ご案内 <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/eiga2005a.html>

「小谷コレクション」

附属図書館中央図書館 2階特別室



「戦後の学校混乱期と西寮誕生」

小谷直筆原稿 / 貞子夫人の代筆原稿

2006(平成18)年1月10日

小谷達雄氏 蔵

終戦の後、小谷は松本に戻るが、校長と一部の教師陣は戦時中の不当な弾圧をいまだ続け、思誠寮の自治も皆無であった。小谷たちは、学校を改革すべく、校長・教師陣を排斥し、自治の回復をめざして西寮の開寮に奮闘した。貧しくも熱い時代の出来事である。

小谷が3年の時(昭和21年9月)にこのころを回想しているが(思誠寮報第15号)、晩年に再び筆を執ったのは、学生時代の最も印象に残った思い出であるためか。小谷の覚束ない文字を貞子夫人が書き直した原稿(絶筆 貞子書)とともに残されている。

昭和20年8月15日は太平洋戦争の敗戦の日
でありました。私は、^{九州}久留米の予備士官学校に入
隊してまいりました。敗戦のニュースを聞いた私
は身の回りの物を整理して、翌月の10日には
軍隊から解放されて京都の父母の元へ帰るこ
とができました。留守中に学校から指示があ
り、9月21日までに寮へ戻るようにな
りました。

数日自宅で休養し思誠寮へ戻つて
2号の自室に入つて全く驚いてしま
あのはつた。思誠寮はどにも
寮の玄関や食堂は1年前と変わらな
私が愛した寮ははいつです。台風
で逃れて身の回りの物を持って避
群集がなんとはなくやろくして、
るのかわのらないつた感じだ
人程の定員に150人以上が寝起きし
しよう。そのうち思誠寮の仲間が
と戻つて来て、寮はこのままで
高生とばつて初めて入寮した時感
英知の精神はど二へ行つたのだから
を合いました。

戦後の学校混乱期と西寮誕生

小谷澤一

昭和20年8月15日は太平洋戦争の敗戦の日でありました。私は九州久留米の予備士官学校に入隊していました。戦後のニュースを用いた私自身の過去の物と整理して翌月の10日には軍隊から解任されて京都の父母の元へ帰る事ができました。留米中に学校から指示があり9月21日までには家へ戻るように指示がありました。そして、
 数回自分で休養を思議奉へ戻った私は中寮の号室に入りましたが全く驚いてしましました。寮に足を入れた途端どこにもおうなつかしい思議寮はどこにもないのです。寮の玄関や食堂は1年おとそりさうなハイハイが私どもを驚かした寮がなっていました。台所や大食堂をさけて集まった人々が身の廻りものごとについて通観して来たような群衆が私達となくぬくぬくしているだけで何をしていこうかわからないうちうちは感じました。その思議寮の仲間が私達と人々を驚かし